
東方狂鬼伝 強妻家たちの日々

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方狂鬼伝 強妻家たちの日々

【Nコード】

N1952Y

【作者名】

CROW

【あらすじ】

ある日幻想入りした少年樋口紅は博麗神社で住む事になった。
そして宴会の日レミリアに「紅魔館へ来て」と言われ翌日紅魔館へ向かった。

第一話

俺樋口紅は友達なぐもしんじの南雲伸治、澤村昭二さわむらじょうじ

と中学校の近くの竹藪にある心霊スポットで有名な真藤病院しんどうへ着ていた。時刻は午後11時だった。病院は結構荒らされていて落書きがいくつかがあっているんな物が散乱していた。

南「荒れまくりだな」

「何か出そうだな」

そして二階の手術室は注射器やガーゼが落ちていた。

澤「次行くか」

「次は北館か」

そして北館一階病室はベッドが廊下に出たりしていたので歩き難かった。

数分後病院から出た俺たちは公園に来た。

「何も起きなかったな」

澤「しかし怖かったな」

そして家に帰った。

父「幽霊見れたか」

「何も起きなかったよ」

そして歯を磨いた後二階の俺の部屋に行った。

「ふう寝るか」

次の日

学校

俺のクラスに居るイケメンで高学歴の生徒会長黒田勉は陰でいじめをしていた。

黒「お前みたいな屑は学校に不要なんだよ」

「ハハハハ」

今日も誰かがいじめられていた。

しかし先生はそれを黙認していていじめられても文句は言えず泣き

寝入りするだけであつた。

澤「黒田最悪だな」

「皆逆らえないし」

南「先生も見て見ぬふりだからな」

その日俺は黒田に体育館裏に呼び出された。

そこには奴と数人の取り巻きが居た。

黒「お前最近調子乗ってるから修正してやるよ」

そして俺を囲み棒で叩きだした。おい、誰かこいつを修正してくれ。

「（少しは手加減しろよ）」

そして黒田は直接手を出していなかった。汚い、さすが会長汚い。

数分後彼らは俺を残して去って行った。

「こんな時はゲームだな」

そして夕食後部屋に入ろうとした時空間が裂け俺は落ちて行った。

「（これってスキマ?）」

そして目が覚めると何処かの神社だった。

「ん」

?「おい、霊夢起きたぞ」

近くに居た角が生えた少女がそう言った。ん?萃香?

「夢だな寝よう」

萃香はゲームのキャラなので夢だと思い目を閉じた。

霊「夢じゃないわよ起きなさい」

「痛っ」

そして俺は起こされた。

「此処ってどこ」

霊「貴方外来人ね、幻想郷よそして此処は博麗神社で私はこの神社

の巫女博麗霊夢（また紫?）」

「（やったー幻想入りしたよ）」

萃「伊吹萃香、鬼だよ」

「俺は樋口紅だ」

その時近くでスキマが開きあの八雲紫が出て来た。

霊「紫あんたでしょ」

紫「ええ、それと彼には能力があるわだから帰せない」
「はあ？」

俺に能力？俺帰れないだって。

紫「もうすぐ使えるようになるんじゃない」
そして消えた。

「これからどうしようか」

霊「とりあえず何日かは此处で住んでいいわ」

「いいのか」

霊「でも掃除とかやって」

その夜

「はあ疲れた、おやすみ」

俺はわずか数秒で眠りに就いた。

第二話

3日目弾幕の出し方を教えて貰うことになった。

霊「手を出してイメージしてみて」

俺はゲームで見たフ란の弾幕をイメージしてみた。すると上手く出せた。

「こうか」

霊「すぐできるなんて珍しいわね（この弾幕って魔理沙が言ってた悪魔の妹と同じじゃない）」

そしてスペルカードの説明になった。そして白紙の紙4枚を貰った。

霊「何かイメージしてみて」

そして出来た。

「Nuclear Fission」

「Supernova」

「Bullet Snowstorm」

「Blood Bullet」

霊「使ってみて」

1つ目は一つの白い弾が二つ目にぶつかって核分裂みたいに増えて行った。

2つ目は一つの大きな黒い弾が爆発して大量の弾が飛び散っていた。

3つ目は大量の白い弾が吹雪のように吹き荒れた。

4つ目は真つ赤な大量の弾幕が高速でいろんな方向に飛んでいた。

霊「始めてにしては上出来ね」

服が若干掠った跡があって結構工口かった。

「ふ、服」

霊「え、きゃあああ」

そして俺に向かって大量の弾幕を放ってきた。そして俺は気絶した。そして目が覚めたのは次の日の昼だった。

今日は宴会するらしいので一緒に倉庫で物を取っていた。

霊「あ」

「ん」

台に乗っていた霊夢が落ちて来た。尻もちをついたので白い下着が丸見えだった。

霊「ん」

「（^ω^）お」

霊「・・・」

「イ、エアアア」

その夜

金髪の魔法使い霧雨魔理沙が絡んで来た。

魔「お前外人か」

それにしても顔が近い

「樋口紅だ」

魔「私は霧雨魔理沙だ」

その時射命丸が来た。

射「見慣れない顔ですね少し取材させて貰いますか」

そして年齢や名前などを聞かれた。その後吸血鬼のレミリアが来た。

レ「誰、貴方」

「外人人の樋口紅だ」

レ「霊夢、この人間借りて行っている？」

霊「別にいいわ」

そして翌日片付けを終えた後紅魔館へ向かった。

レ「突然だけど妹の部屋へ行ってくれるかしら」

「出会ったばかりの奴にどうして」

母さん、俺死亡フラグ立ったよ。

そして咲夜に連れられ地下室の前へ行った。地下牢が隣にあった。

咲「では気を付けて」

そして良く分からない材質の扉を開けるとフランが寝ていた。しか

も膝を立てていたのでピンクの下着が丸見えだった。

「さてどうしようか」

脳内会議・・・

2「襲つちまいな」

3「ここは紳士的に」

4「ふう」

5「ここはそつとしておきましょう」

6「じゅるるぐふお」

7「きんも」 6「ドカツ

8「うは」

?「オヤスミー（＾o＾）ノzzzzzz」

まともな意見が無かった。

その時彼女が起きた。

フ「誰人間？」

「あゝ」

フ「え、きゃあああ（変態だー）」

そして熊のぬいぐるみを投げた。

「グフォッ」

そして気絶した。

フ「気絶しちゃった」

目を覚ますと彼女のベッドの中で俺の上に彼女が乗っていた。

「ん」

部屋汚いな。掃除するか。

「ヒヤッハー掃除だ」

フ「何いきなり」

俺は彼女を振り落とし近くにあった箒で掃除した。

少年掃除中・・・

フ「ねえ弾幕ごっこ出来る」

「出来るけどあんまり強くない」

そしてフランがスペルを1つしか使わず飛ばないという条件で始めた。

フ「いくよー」

「（可愛いのに凶悪だな）」

ゲームでやったことがあるので余裕だった。

そしてスペルを使った。

「Nuclear Fission」

だんだん彼女が押されて来た。

フ「アハハ（あれ、おかしくなってきた）」

その時弾幕が消えた。そして弾幕が早くなって複雑になった。

「ヤバイ狂ったみたいだ」

フ「逝クヨ禁忌「フォーオブアカインド」」

彼女が4人になった。

フ2「禁忌「レーヴァテイン」」

フ3「QED「495年の波紋」」

フ4「禁忌「禁じられた遊び」」

そしてそれぞれがスペルを使用して回避不可能になってしまった。

そして俺は弾幕の嵐に飲み込まれた。

「（此处で死ぬのか、まあこいつだったら別にいいか）」

その時

（まだ終わらない）

頭の中で声がした。

そして俺の頭に角が生えた。わー人間卒業したよ。そして俺は無傷だった。

フ「え、また殺しちゃったの、嫌ああああ」

「大丈夫生きてる」

フ「え？生きてたの」

「人間じゃなくなっただけ」

フ「そう言えば名前は、私はフランドール・スカーレット」

「樋口紅だ」

フ「じゃあお兄ちゃんって呼んでいい」

「却下（そんな呼ばれ方したらお兄さん発狂するじゃないか）」

フ「じゃあお兄様って呼ぶ」

「え」

フ「命令よ」

急に真剣になってそう言った。

「ハ、ハイワカリマシタ」

そして咲夜が来た。

咲「む、無傷！（あれ、角？）」

彼女は無傷の俺を見てびっくりした。

第三話

そして夕食後、地下の図書館へ向かった。外の漫画や辞書もあった。

「ん、これはジャ。プ」

フ「ねえお兄様」

「ん」

フ「あの、ええっと、お兄様が好き」

「はあ」

いきなりそう言った。俺みたいな変態が好きなわけないだろう。

「ハハハ、冗談止める」

その発言が大きな間違いだった。

フ「冗談じゃないもん」

俺の右腕が破壊された。

フ「好キナノニヒドイ、じゃア死ンデ私だけのモノにナッテネお兄様」

そして俺を投げた。投げられた俺は壁を破り庭に出た。

パ「何？」

「どうしたんだよ」

その時スペルカードが現れた。

「ん、「斬空」」

使うと刃が紫に輝く日本刀が現れた。

フ「禁忌「フォースオブアカインド」」

フ2「秘弾「そして誰もいなくなるか？」」

フ3「禁忌「フォービドウンフルツ」」

フ4「禁忌「フォースオブアカインド」」

フラン4が同じスペルを使った事により8人になった。ルールを壊したのだろうか。

フ5「禁忌「クランベリートラップ」」

フ6「禁弾「過去を刻む時計」」

フ7「QED」495年の波紋」

フ8「禁忌「禁じられた遊び」」

そして発狂弾幕になった。俺は斬空で弾を斬っていた。

「Supernova」

俺が鬼になったことによりスペルの威力が上がった。

そして次々とフランの弾幕が消えて行った。しかし俺の弾幕を破壊した。

「Blood Bullet」

偶然使う瞬間に俺の血が付いた。そして赤い弾幕が高速で飛びだした。

フ「アレ壊レナイ、ドウシテ？禁忌「レーヴァテイン」」

そして巨大な火柱が俺をかすめた。そして幻想郷の結界に罅が入る音がした。

しかしすぐ高速で離脱した。

その時またスペルが出た。

「ん？「the Beast」」

使うと指に鋭い爪が現れ顔が狼みたいになり鋭い牙が生え角が消えた。そして運動能力が上がりスピードがフランを上回った。

「- - - - ツ（おお凄いい速い）」

そしてフランが一人に戻った。

フ「私ヨリ速イキヤア」

そしてフランの周りを高速で動きまわり左腕を食いちぎった。やり過ぎかな。腕は再生しなかった。

そして抱きついた。

「ふう」

フ「え、お兄様」

俺は元に戻った。いやー結構疲れた。

その時紫が来た。

「ん？」

そして銃を撃った。

「やばい」

銃弾は俺が手で掴んだ。よく見ると銀で出来ていた。

「何してるんだ」

紫「やっぱりこの子は危険よだから殺すのよ、どきなさい」

「嫌だな」

紫「じゃあ貴方も」

その時何かが浮かんた。

「あらゆる能力を使う程度の能力」

「能力を使いこなす程度の能力」

そして「増やす程度の能力」で殺気と狂気を増やし、「保つ程度の能力」で理性を保った。

「ククク」

そして紫の元へ向かった。

紫「藍」

彼女は式神を出して俺を足止めした。

「邪魔だよ」

俺は彼女を全力で殴った。

藍「すみません紫様」

彼女は倒れた。

「ヒヒヒ」

紫はスキマで逃げようとしたが閉じかけのスキマをこじ開け彼女を引きずり出した。

そして地面に叩きつけた。

紫「こ、この私が恐怖するなんて」

紫は恐怖で動けなかった。そして彼女の首元のすぐ隣の地面に刀を刺した。

「あいつは俺がどうにかする、帰れ」

紫「分かったわ、もし出来なかったら今度は容赦しないわ」

そして紫はスキマに入った。

その時レミリアが駆けつけた。

レ「大丈夫!？」

そしてフ란の部屋

フ「お兄様大好き」

そしてキスされた。多分ファーストキスだ。

「すまん冗談とか言つて」

フ「許さないよ、でも私の始めてを貰ってくれたら許してあげる」

「うわ、離sくあせd r f t g y ふじこ1p」

フ란がパンツを脱いで俺に乗った。

フ「ふふふ」

「(もうどうでもいいや)」

そして俺は押し倒された。

もう一つの終わり

そして決着が突こうとしたその時フランに銃弾が当たったそして彼女の周りだけ昼になった。

「フラン！」

そして彼女は灰になった。

？「意外と呆気ないわね」

そこには銃を持った紫が居た。

「何で殺した女狐エエエ」

紫「この子は狂うと幻想郷にとって危ないじゃない」

「ウワアアア」

紫「無駄y」

そして俺は刀で彼女に斬りかかった。そして彼女が体を出しているスキマごと彼女を両断した。

「アアアアア」

その時全てのスペルが目の前に浮かび一つになった。名前は「Re wind」日本語にすると「巻き戻す」という意味だった。俺はすぐ使った。そして目の前が眩しくなって意識が遠のいた。

「眩しい」

気が付くと図書館だった。そしてフランがこう言った。

フ「私、お兄様が好き」

「俺みたいな変態がか（此处で笑うと駄目だったな）」

フ「だって壊れないし普通に接してくれたし」

誰かが見ていた。

？「カップル成立」

？2「こあばれるでしょ」

小「すみませんパチユリー様」

「貴方達なにしてるざますの」

フ「ウケ狙ってるのお兄様」

パ「ばれたじゃない」

その夜

フ「お兄様フフフ」

若干狂い気味のフランがスカートをたくし上げピンクの下着を見せた。これは何というエロゲですか？

「何だ（フランちゃんうふふ）」

フ「「ぴー」してあげる」

「離sくあせdrftgyふじこーpもうでうでもいい」

そして今夜童貞卒業した。

第四話

朝

「ん」

起きるとフランのパンツが近くに落ちていた。そう言えば昨日ああああああ

フ「お兄様、おはよう」

その時レミリアが入って来た。

レ「・・・そんな妹に先越されるなんて」

そういつてペタンと座り込んだ。

数時間後フランとレミリアを連れ外の世界へ行った。服は俺が適当に作った。服はレミリアが赤で「BLOOD」書いてある黒いTシャツとピンクのフリルが三段重なったスカートでフランは黒い髑髏が描いてある白いTシャツと赤のレミリアと同じタイプのスカートだった。

そして近くの遊園地

フ「あそこ行こ」

最初はジェットコースターで二つのループと傾斜が70°の坂があった。

「あー」

フ「それ、棒読みだね」

レ「あああああああ」

そして次は病院をモチーフにしたお化け屋敷

お化け役（以下、化）「キエエエエ（あれ、可愛い、うは、みなぎってきた）」

レ「きゃあああ」

レミリアは病室から出て来たお化け役に追いかけていった。
フ「行っちゃったね」

「追いかけよう」

レ「きゃあ、誰、スカートめくったのは」
化「白か」

レ「へ、変態」

ゲシッ

化「あへ（まさか美少女に踏まれるなんて、この仕事やってよかった）」

そして彼女に追いついた。レミリアがお化け役の人を蹴っていた。
レ「なんでニヤけるのよ」

「行こうか」

レ「そうね」

そして昼

飲食エリアで昼を食っていた。外を見ると俺のクラスメイトが沢山いた。俺のクラスは毎月第三日曜日に計画を立て何処かへ遊びにくという事をしていた。

「んあいつら」

俺は奴らに気付かれないように帽子を創った。

フ「知り合い？」

「ばれたら不味い」

南「樋口」

南雲にばれたらしい。彼しか気付いていなかった。

「アーワタクシニホンゴワカリm南「ごまかすな」」

適当にごまかそうとしたが無駄だった。

南「その二人は誰だ」

フ「フランドール」

レ「レミリア・スカーレット」

南「ん、外人？」

レ「さっさと消えなさい」

南雲はレミリアにビビって何処かへ行った。

そして夕方

観覧車

「人がゴミのようだ」

フ「何言ってるの」

レ「フラン、今までちゃんと向き合おうとしなくてごめん」

レミリアが謝った。

フ「別にいいよ何度も抜け出してるし、それより」

そして俺の右腕に噛み付き血を吸った。

フ「うひゃぁいいいい」

「・・・」

レ「私も」

レミリアも噛みついた。

レ「今までで一番美味しい」

その後何故かフランの部屋で一緒に寝ることになった。

「（顔が近いな）」

2時間後目を覚ますとレミリアが隣に居た。

「ん、いつの間に」

レ「気にしないで寝て」

「いや、気にするだろ」

そして1時間後やっと眠れた。

Wake up The Fallen angel

昔、人に興味を持ったある天使が墮天した。そして神により南極付近に封印された。

そしてある夜

南極海付近の島の人々が巨大な水柱を目撃した。

男「おい、誰かいるぞ」

女「そんな、まさか」

何と誰かが出て来た。背中には6枚の灰色の翼があった。そして髪の色は黒だった。

？「何年経ったんだ」

彼は墮天する時に名前を捨てた為名前は無い。

？「綺麗だ」

彼はオーロラを見ていた。

そして数年後彼は紅の家の近くのアパートに住んでいた。そしてある日「八雲紫」と名乗る女性が来た。

？「誰だ（人間じゃないな）」

紫「とりあえず来てもらうわ」

そして彼はスキマに落ちた。

？「うわあああって俺飛べるんだ」

そして出た場所は天界だった。

？「どこだ此処？、とりあえず此処に家を創るか」

そして一瞬で小さな小屋が出来た。

？「寝るか」

？2「こんな小屋あったかしら」

そしてその小屋を不審に思った比那名居天子が入って行った。

？「ん、誰だ（何て綺麗な人だ）」

彼は彼女に若干惚れた。

天「あんたこそ誰よ」

？「名前のないただの墮天使だ」

天「名前無いの」

？「捨てた、もう覚えてない」

？「ところで此処は何処だ」

天「幻想郷の天界で言う所よ」

？「所で名前は」

天「比那名居天子、天人よ」

？「名前考えてくれないか」

天「なんであんたの為に考えなきゃいけないのよ」

？「じゃあいい、えつと決まった」

天「早っ（自分で考えれたじゃない）」

？「灰人^{かいと}」

天「あんた気に入ったわ毎日来てあげる」

そして帰って行った。

灰「毎日・・・」

Wake up The Fallen angel ? (前書き)

オリジナル設定があります。

Wake up The Fallen angel ?

次の日の午後

「やることないからパソコン使うか」

そしてノートパソコンを出して外の回線につながるよう弄った。

「お、結構いける」

そして俺の事が書いてあるページを見つけた。

「えっと「南極に謎の生物？」」

そして他の情報を見ていた。

その時扉の開く音がした。

天「来てあげたわよ」

「アーソーデスカ」

天「ちよつと何よその反応はせつかく来てあげたのに」

「じゃあ話をしよう、あれは確か一万、いや三千年前だったか・・・」

「

天「後ろ向きながら喋らないでよ」

そして彼の話が始まった。

俺は昔天使の都で暮らしていた。そして下界の様子を時々見ていた。

そして俺は人間の暮らしを見ていた。そして人間の事をもっと知り

たいと思い墮天した。

そしてしばらく人間として暮らしていた。しかし神にばれて俺は封

印された。

天「そんなことがあったの」

「あパソコンが狂った」

そしてネットに接続できなくなった。

「どうしてこうなった」

天「落ち着きなさい」

しばらくアスキーアート見たいに踊っていると天子に叩かれた。

「すまん」

そしてその夜天子の家

彼女には天雅^{てんが}という兄がいた。

天雅「天子、どうしたんだ顔が赤いぞ」

天「べ、別に（彼の事で頭が一杯だわ）」

そして翌日

？「奴は一体」

彼は天雅の命で天子の後を付けていた。

天「灰人、来たわよ」

「今日も来たのか」

？「天雅様に報告しなければ」

彼は帰って行った。

天雅「誰だそいつは」

？「彼は灰色の羽を持っていました」

天雅「そうか」

そして天雅は倉庫へ入って行った。

その頃・・・

天「この世界の戦い方教えてあげるわ」

「どんな奴だ」

天「まずは弾幕よ」

そして天子が弾幕を出した。

「こうか」

そして手を翳すと黒い大量の弾幕が出た。

天「なかなか出来るわね」

天「次はスペルカード、はいこれ」

そして3枚の白紙のカードを渡した。

天「何かイメージしてみなさい」

「えっと、出来た」

そして出来たのは

驚光「アメイジング・スパーク」

紅炎「プロミネンス」

岩雨「メテオレイン」

そして1枚目を使った。太さが100mの極太ビームが出た。頑丈な結界を張ったので被害は出ない。

そして次は巨大な黒い火柱がいくつも発生した。

最後は巨大な石がいくつも降って来た。

天「あんた凄いわね惚れた」

「俺も好きだ、最初会った時から」

俺はさりげなく告白した。

天「え、そんないきなり何」

そして抱きしめた。彼女の鼓動が速くなったのが感じられた。

天「わ、私も好きよ灰人」

そしてしばらく抱き合った。

Wake up The Fallen angel ?

翌日、天雅は天子を尾行した。

天雅「あいつは一体」

彼は木の陰から見ていた。その時

「おいその奴出て来い」

天「え」

天雅「ばれただと」

彼は灰人の前に現れた。

天雅「お前妹が欲しければ俺に勝って貰おうか」

「分かったよ紅炎「プロミネンス」」

天雅「え、ちょ、お前それは無しd」

ピチューン

彼はあっさりと負けた。

天雅「分かった妹を連れて此処から出て行け」

天「いいの」

天雅「奴が好きなんだろ」

「天子行くか？」

天「もちろんよ」

「じゃあ驚光「アメイジング・スパーク」」

スperlで地面に穴を開けた。そしてその穴へ落ちて行った。

天雅「淋しくなるが俺には衣玖が居るからいいか」

地上

博麗神社

霊「何あの光」

魔「行ってみようぜ」

彼のアメイジング・スパークを目撃した二人はその場所へ向かった。

「着いたぞ」

天「分かってるわよ」

その時あの二人が来た。

霊「あんたねさっきの光を撃ったのは」

「何だいきなり」

魔「お前あの時の天人」

「知ってるのか」

天「前に異変起こした時に倒されたのよ」

霊「あんた何者よ場合によっては退治するわよ」

「堕天使の灰人だ、危害を与えるつもりは無い」

霊「勘によると悪い奴じゃなさそうね」

魔「さっきのはどうやって出した」

「これだ」

魔理沙が気になったのでスペルを見せた。

魔「おいさっきのスペルカードか」

「そうだ」

霊「何だつまらない帰りましよ」

二人は帰って行った。

射「あややあれは天人じゃないですか」

パシャ

その夜

「家出来た」

魔法の森近くに家を建てた。

そして寝た。

天「暖かいわね」

the Devil who likes flower

500年前ヨーロッパのある村

ある青年が悪魔を召喚した。両親を奪った村人に復讐するために。彼は村人によって瀕死の重傷を負わされもう虫の息だった。

青「よ・・・成功・・・だ」

そして魔法陣が赤く輝き誰かが出て来た。彼の髪は黒く瞳は赤だった。そして頭に角背中には蝙蝠みたいな形の黒い羽根生えていてそれに竜巻のようなものを纏っていた。

？「呼んだか（今エロゲいいとこなのに）」

村人「いたぞ」

？「早く何がしたいのか言ってくれ」

彼は既に死んでいた。

？「死んでるじゃねえか、そうだ此処を花だらけにしよう」

そして一瞬村が黒い炎で包まれ色とりどりの花が咲き乱れ、花だけが残った。

？「まあ綺麗」

現代

彼の名は現在^{あかつきれいと}曉麗斗で能力は「影を司る程度の能力」と「解放する程度の能力」で現在日本のとある都市に住んでいた。

「あれから500年か早いな」

彼はあの時の村をネットで見っていた。

「まだ咲き続けているのか凄いな今度行くか」

その時自分の真下の空間が裂けた。

「え、まさかの俺幻想入り？」

そして幻想郷太陽の畑

「ん、早速死亡フラグー（まあ俺強いから大丈夫か）」

そして着地した。

「しかし綺麗な向日葵だ」

そしてしばらく見とれていた。

？「気に入ったみたいね」

「うひょ（ゆうかりんキター）」

彼女は彼の東方で好きなキャラだった。

「花は嫌いじゃない（まさか戦う気か）」

幽「貴方強そうね戦いなさい」

「じゃあ場所を変えよう」

そして少し離れた場所

幽「行くわよ」

そして一気に距離を詰め傘を横に振った。俺はマトリックス見たいにかわした。そして羽と角を出した。

幽「本気出したわね」

そして彼は一気に彼女へ飛んだ。彼女は反応が追いつかず、撥ね飛ばされた。そして彼女の影を使い彼女を動けなくした。その時彼女の傘から太い光が出た。彼は飲み込まれた。

幽「やった？」

彼は影に潜って彼女の影へ移動した。そして背後から影で作ったハンマーで上空に弾き飛ばした。

そして落ちる瞬間に彼女を影で作った手で掴んだ。

幽「もう無理よ」

「そうか」

そして彼女を離れた。

幽「花が好きな人は嫌いじゃないわ」

「はい？」

幽「強い男も好きよ」

「え？」

幽「だから好きになったみたい」

「ええええええ（惚れるの早っ）」

幽「貴方が欲しいわ」

「俺も好きだ」

そしていきなり抱きしめた。

幽「所で名前は」

「暁麗斗だ」

幽「私は風見幽香よ」

その時天狗の射命丸が写真を撮った。

文「これは・・・」

二人は気付かなかった。

そして夕方

「夕飯作ってやる」

幽「まあ頼もしいわね」

翌日文々。新聞には二人の写真と大きな文字で「あのフラワーマスターに彼氏!?」書かれた。

そして魔理沙が真偽を確かめるために訪れた。

魔「まさか本当にいたのか」

彼女は驚いた。

幽「何の用」

魔「サヨナラ」

魔理沙は猛スピードで飛んで行った。

幽「行っちゃったわ」

その夜

幽「ふふふ貴方、始めてらしいわね」

「あーどーでもいい」

そして押し倒された。

第五話

人里の無法地帯では闇のオークションが開かれることになった。売られる物は幻想郷の女性も含まれていた。

そして主催者たちが攫いに行った。

太陽の畑

麗斗は外出していた。

男「行くぞ」

まず一人が「眠らせる程度の能力」で幽香を眠らせた。そして二人目が「封じる程度の能力」で妖怪の力を封じて手枷を付けた。三人目は見張りだった。

紅魔館

フランが攫われた。

紅はフランの誕生日なのでプレゼントを買いに行っていた。二人以外は全員眠らされた。起きた時用に力を封印する首輪をつけられた。そしてその他人里の女性が集められた。

主催者「5人か」

俺は紅魔館のフランの部屋へ帰って来た。しかし彼女はいなかった。そして図書館パチュリーが寝ていた。小悪魔も同じく寝ていた。

パ「あら、帰って来たの」

そしてレミリアの部屋

「寝てる・・・（グハッ白）」

レミリアが倒れていた。しかも膝を立てていたので白い下着が丸見えだった。

レ「ん、あ、きゃああああ」

ピチューン

レ「それより誰かが来て私たちを眠らしていったの」

「フラン知らないか」

レ「居なかったの」

「部屋に居ない」

レ「じゃあ探してきなさい」

「じゃあ行ってくる」

そして近くの湖を探した。

その時

？「あたいと勝負しなさい」

チルノだった。急いでたので省略した。

「キングクリムゾン」

チ「え」

ピチューン

そして人里

透明になつて人里の門を通つたそして路地裏で元に戻した。

「ん此処は」

路地裏を抜けると誰かが話していた。

男「もうすぐオークションだな」

男2「女も売られるんだってな」

男3「吸血鬼と妖怪と里の女か」

「まさか」と思い俺は彼等について行つた。

「此処か」

その頃太陽の畑

麗「幽香何処だ」

麗「そつだ影を使おう」

そして始まつた。

男「まずは商品を見せます」

そして出されたのは日本刀と誰かの下着と着物と風見幽香、フラン
ドール、その他三名の女性だった。

その時幽香の影から男が出て来た。

麗「どこだ此処」

「ん、あれは新聞に載つてた奴か」

彼は強大な魔力を持っていた。そして俺もフランの元に向かった。

「フラン」

フ「zzzz」

その時主催者の男が来た。

男「何の騒ぎだ」

「お前か主催者は」

男「何だお前」

そして能力を使った。

「能力が封じられただと」

男「連れて行け」

その時幽香の近くにいた男が影を伸ばして彼の胸を貫いた。

麗「死ね」

幽「ん、麗斗」

麗「ん、お前はあの吸血鬼の妹」

フ「誰」

麗「幽香俺ちよつとこいつらの用事がある」

幽「着いて行くわ」

そして外から慧音と自警団が入って来た。

客「逃げろ」

客は捕まった。

そして紅魔館

彼らは付いて来た。

「で何の用」

麗「妹に用がある」

そして図書館へ行った。

小「に、兄さん」

パ「兄さん？」

「小悪魔の兄か」

麗「久しぶりだ妹よ」

そしてその夜フランの誕生日を祝った。

「俺からのプレゼントだ」

中は金の指輪だ。

フ「ありがとうございますお兄様」

彼女は喜んでくれた。

第17話（前書き）

「萃香は俺の嫁」と言う方は閲覧注意

第17話

人里では妖怪に恨みを持つ者が集まっていた。そして妖怪を滅ぼすという無謀で愚かな目標を掲げた。

そして最初の標的は鬼の伊吹萃香であった。彼らは鬼の苦手な煎り豆を用意していた。そして「封じる程度の能力」を持つ者が彼女の力を封印してレイプして袋叩きにして人里に晒すという予定だった。

そして彼女が一人の時を見計らって豆を投げ付ける係の5人が一斉に豆を投げた。彼女はしばらく動けなくなったそして能力で彼女の力を封じた。

萃「うわ、お前ら何だ」

そして彼女は押さえつけられた。そして数時間後

萃「もう止めてくれ」

彼女は犯され続けて心がズタズタになった。

そして全員にリンチされた。脚は踏まれまくって変な方向に曲がっていた。そして顔の右半分は醜く腫れていた。瓢箪は踏み砕かれた。そして最後にリーダーの横山に「炎を司る程度の能力」で体中に火傷を負った。そして人里の入り口付近に磔にした。

翌日そこへ人々が集まった。

男「何だ妖怪じゃないか」

慧「鬼じゃないか」

妹「まだ生きてる」

萃「――」

そして自警団が回収した。しかし横山が仕切っていたので近くの洞窟に捨てられた。

そしてその洞窟は変な声が聞えると噂になった。それを聞いた元鬼

神の陽炎は洞窟へ入った。

陽「これは酷いな一体誰が」

彼が食べ物をやると飛び付いた。

萃「――」

腕の鎖を見て昔から好きだった萃香と確信した。

陽「萃香か」

彼女は首を縦に振った。

陽「しかしどうしてこうなった」

萃「――」

陽「治すか」

そして彼は自分の能力の一つ「復元する程度の能力」で襲われる前の状態に復元した。

萃「はあはあ」

陽「大丈夫か」

萃「嫌ああああ」

そして彼女は気を失った。服は着ていなかったなので2つ目の能力「創造する程度の能力」で浴衣を作って着せた。

陽「精神状態も危ないな」

そして妖怪の山の麓の自分の家に持って行った。

陽「やった奴は血祭りにするか」

そう言いながら夕飯を作った。

そして彼女を起こした。

「おい起きろ」

萃「ん、陽炎？」

「とにかく飯にしよう」

食後、彼女を風呂へ入れた。

彼は部屋で待っていた。

その頃横山達は妖怪の山へ攻め入った。

そして彼の家の前を通る時話してしていた。そして彼は彼らの会話

を聞いた。

陽「（誰かいるのか）」

男「あの鬼とやる時最高だったな」

男2「もう死んでるんじゃないか」

男3「ハハハ鬼があんな簡単にやれるなんてな」

陽「（萃香の事か）」

そして外へ出て薙刀「胡蝶之舞」を取り出した。

陽「お前らか」

そして猛スピードで彼らに襲いかかった。

男「全員分かれる」

彼らは別々に逃げて行った。殺したのは5人だった。

陽「畜生！、逃げられた」

ドンッ

彼は地面を思い切り踏んだ。山全体が揺れた。そして彼は彼らを追いかけて行った。

その後合流した彼らは白狼天狗と戦闘になった。横山が炎で灰にして全滅させた。

そして山火事が起きた。射命丸は写真を撮っていた。一は燃えてるのを見て燃えてる所を巨大な壁で囲った。

「何じゃこりゃあ」

そして彼は大量の水を落とした。そして鎮火した。

舞「一体誰が」

そして彼らは山を登って行った。途中で大天狗達に見つかり再び戦闘になり半数が捕まったり死んだりした。そして生き残った奴らが天魔の家を襲撃した。

「ん、外が騒がしい」

外に出ると槍や矢や刀を持った人々が居た。

「人間か」

横「行くぞ」

そして一気に押し寄せて来た。俺は式神の黒炎を使ってみた。口から黒い炎を吐いた。浴びた奴は灰になった。しかし家が燃えそうなので止めた。

後ろからフランがレーヴァティンを使った。

男「ひ、ひい」

そして天狗の大群に囲まれた。そしてほとんどが捕まった。しかし横山と能力者の山田が抵抗した。

横「逃げるか」

そして彼らは闇に消えた。

「あ、待て」

その時一人の角を生やした男が来た。殆どの奴が強力な殺気に当てられ気絶した。そして彼らを切り刻んだ。

陽「ふう帰るか」

彼は飛んで行った。捕まった人々は人里へ引き渡された。

そして家

陽「（今度こそ告白するか）」

そして彼は告白した。

陽「萃香」

萃「あ、お帰り」

陽「昔から好きだった」

そして抱きしめた。彼女は顔を赤くした。

萃「！」

そしてキスした。

萃「私も昔から好きだった、まさかそっちから言ってくるとはね」

陽「それは良かった」

その頃一人で風呂に入っていた。その時背中に柔らかい何かを感じた。そして振り向くとこの前会ったルーミアが居た。しかもタ

オルを巻いた状態で

「えええええ」

ル「そんな驚かなくてもいいじゃない」

「どうやって入って来た」

ル「ずっと貴方の影に隠れてたのよ」

これから俺はどうなってしまうのだろうか。

第七話

陽はルーミアと何処かの森で創った家で暮らしていた。そして朝起きると彼の手にリボンが握られていた。

陽「これはルーミアの」

そしてルーミアの封印が解け妖艶な美女になった。

ル「昨日のお礼してあげる」

そして押し倒された。お礼ってレベルじゃねえぞ

陽「（親父、俺は幸せだ）」

次の日生徒会長の黒田が幻想入りした。そして「操る程度の能力」が目覚めた。

そして紅魔館にいる紅とフランを見た。

黒「いいこと思いついたあはは」

そして博麗神社にいた霊夢、魔理沙の心を操り服従させ紫と妹紅も同じようにした。

そして紅魔館で美鈴、咲夜、レミリア、パチュリーもあつさりと操られた。

そして「紅と居る女を殺せ」と命じた。

そして紅魔館の4人はフランの部屋へ向かわせたそして他の4人は待機した。

フランは部屋に居た。紅はパチュリーに襲われたがすぐ眠らした。

パ「私は何を」

その時フランの部屋から音がした。

「部屋から聞えた」

そして部屋へ瞬間移動した。そこでは3人がフランに集中砲火を浴びせていた。

「止める」

そして3人を元に戻そうとしたが能力が無くなっていた。

フ「お兄様あ皆が変」

「逃げるぞ」

そして

「外行くか」

そして出ると攻撃された。魔理沙と妹紅だった。

「何だ」

魔「そいつをよこせ」

妹「嫌なら力ずくで」

「やべ」

俺は「Supernova」で足止めた。その隙に逃げた。

フ「お兄様皆どうしたんだろう」

その時胸に痛みを感じた。よく見ると俺の左胸にグングミルが刺さっていた。

第八話

そして俺は倒れた。

フ「そんな嘘でしょ嫌ああああ」

魔「次はお前だ」

フ「皆壊れぎやああ」

フランに大量のお札が貼り付いた。

フ「力が使えない」

霊「今よ」

そして弾幕を浴びせた。

フ「ギヤアアア」

そして俺は死んだ筈だった。

？「まだ死にたくないか」

『まだ終わってたまるか』

？「俺は紅鬼お前の前世、今からお前に全ての力をやる」

そして目を覚ました。能力も復活した。そして体には黒い炎を纏っていた。

フ「お、お兄様ああ」

フランはボロボロだったので傷を治した。そして霊夢たちは逃げに行った。逃げ遅れたレミリアを元に戻した。レミリアはスキマで紅魔館に送った。

「さて」

フ「着いて行く」

そしてフランを小脇に抱えて追いかけて行った。たどり着いたのは博麗神社だった。そしてあの黒田が居た。

黒「まだ死んでなかったのかお前らやれ」

俺は彼女たちを元に戻した。全員倒れた。

「じゃあな」

俺は黒田を外へ繋がるスキマに落とした。

「帰ろうか」

そして紅魔館へ帰った。

狂ったワケ（前書き）

グロ&エロ注意

フランが好きな人は閲覧注意

狂ったワケ

495年前フアンは能力と狂気と羽が無く身体能力もあまりなかった。

ある日フランは母と姉からはぐれて森をさまよっていた。

フ「お姉様どこ」

月が出ておらず暗かった。

フ「暗いなあ」

「今日はあいつをやろうか？」

「良さそうだ？」

「早速やろうか」

そして5人の男達はフランに近づき取り押さえた。

「え、何、離してよ」

「お嬢ちゃんいいことしようか？」

そして下着を脱がし触りだした。

フ「きゃあ」

そして彼女に硬くなった「――」を押し込んだ。

フ「ぎゃあああ痛い痛い痛い」

十分後 2 人目

フ「あ、あ、嫌」

そして3、4人と犯され。5人目

[illegible]

そして彼女は不気味に笑い手を握った。すると一人の頭が吹き飛んだ。

フ
「
ア
ハ
ハ
」

背中にはあの独特の形をした羽が生えた。

「うわあああ？」

そして2人目は体全体を破壊された。

3 人目は腹を引き裂かれ内臓を引き出されて頭を破壊された。

4 人目は背中を抉られ背骨を引き出されて、頭を踏み砕かれた。

5 人目は逃げていた。

? 5 「うわああああ来るなあ」

フ「貴方が悪インデシヨジャアネ」

そして二人目と同じように破壊された。

数分後レミリアと母が見たのは、返り血で汚れ狂ったように笑うフランだった。

レ「フラン」

フ「オネエサマ綺麗ナ羽デシヨ」

そしてフランは倒れた。それから494年間地下室で眠り続けた。

フ「ん、此处は」

彼女は自分の羽を見た。あの出来事を覚えていなかった。

フ「何これ綺麗」

漏れた日光で羽の七色の水晶見たいなものが輝いていた。

フ「暗いな」

彼女は魔理沙が来るまで誰とも話すことは無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1952y/>

東方狂鬼伝 強妻家たちの日々

2011年11月27日19時58分発行